

はなぜですか？もし、男の子がお店に人形を買いに行ったら、店員はどんな反応をしますか？人形を買って家に帰る途中で友達に会ったらどんな会話をしますか？」というような問いかけをし、子どもたち自身にすでにジェンダー（社会的性差）が刷りこまれていることに気付かせます。

一般的に教育とは新しいことを学んでいくことと考えられていますが、男女平等教育はそれとは逆に、生まれてからずっと「男の子らしく、女の子らしく」といつて刷り込まれてきたものを脱ぎ捨てていくという「unlearn（アンラーン）」の教育であることの一例です。

## 男女平等教育は

### どんな科目の中でもできる

教師の視点さえきちんとしていれば、どんな科目の中でもできるという例として、育児休業を算数で取り上げている部分を紹介しましょう。

「お父さんもお母さんも18週間の育児休業を取れます。お母さんが初めの12週間休むとお父さんは何週間とれますか？」と、一年生でもできる算数の問題として導入しながら、育児休業制度があること、しかも父親も育児休業を取れることを子どもたちに意識させています。（現在のノルウェーでは、100%有給で43週、80%有給で53週の育児休業が取れます。90%近くの男性が育児休業を取っています。

すが、このような高率になったのは1993年に導入された、育児休業のうち5週間は父親専用という「パパクオータ制度」の影響が大きいです。）

## 様々な形の家族

二年生用の「ブック2」では、一転して離婚家庭の話になります。結婚制度に対する考え方が大きく揺らいでいる現在、「離婚」は避けられない問題です。小学校のクラスの中にも離婚家庭の子どもたちが増えているのが現実です。「ブック1」のような家族だけではなく、離婚家庭も含めて様々な家族の形があることをきちんと示し考えさせています。

後半は、学校が舞台です。学校でいじめやケンカなどが起きた時、どのように解決したらよいか子どもたちに問いかけます。暴力ではなく、話し合いによる解決を強調しています。人間の集団には意見の対立が出てくるのは当然のことだから、その時はどうするかというルール作りが必要なこと、子どもたちが自分の気持ちを卒直に表現できるようになることが大事なことで、従来「泣いてはいけない」と言われてきた男の子にとっては、特に重要であることなどをあげています。小さい時からの暴力を否定する教育が、DVや戦争の防止につながることを意識して書かれています。

## 女性向きの仕事と

### 男性向きの仕事ってあるの？

三年生用の「ブック3」は、子どもたちが様々な職業に就いている地域の人たちを訪ね、仕事に男女の別があるのかインタビューしていくことが中心になっています。どの人も「昔はあったけど、今は、もうなくなってきたいます。女性でも男性でもやりたいという気持ちと経験を積むことで、どんな仕事でもできますよ」と答えます。町の議員をやっている近所のおばさんも登場し、議員になって社会を変えていくということを子どもたちにも身近なこととして感じさせています。

## 魔女とは

### 自立した女性のことだった！

高学年用の「ブック4」「ブック5」では、一般の歴史の教科書では取り上げられることの少ない、女性たちの歴史を学びます。時代により、女性の社会的地位や役割が変わってきたこと、だから現在の女性の状況も変えられるものであることを子どもたちに気付かせます。中世の「魔女」も、実は様々な能力を持った自立した女性たちであり、当時の社会規範から見て危険視されたため、火あぶりなどの過酷な迫害を受けたことや、参政権を得るために闘った女性たち、平和を